



名古屋柳城短期大学

ちやべるにゅーす

第3号

2002年4月1日

聖書には、創世記の第1章にでて「光あれ」という語の他、「世の光」や「光の子」というように、光という語が使われていることに注目したい。これらのうち「世の光」は、「マタイによる福音書」の5章14節～16節に見られる。「あなたがたは世の光である。……あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」。世の光となるためには不屈の信仰が必要である。イエス・キリストは同じ5章の山上の説教で、何が人生において幸いであるかを述べた後、種々の迫害や中傷に負けることなく、それらを信仰を深めるための試練として、克服することが大切であることを教えている。

「光の子」は、「エフェソの信徒への手紙」の5章8～9節に見られる。「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光になっています。光の子として歩みなさい。光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです」。この中の「光の子として歩みなさい」は、キリスト教関係の幼稚園で、保育のモットーとして用いている園がある程、親しまれている。この手紙は、エフェソの教会員にあてられており、光の子は必ずしも子どもだけを考えているわけではない。

「光の子」は、情欲に迷わされ滅びに向かっていく古い人を脱皮して、心の底から新たにされ、神に倣う者になることを意味している。そ

のためには「主に結ばれて」いることが重要であり、「光の子」が独走することがあってはならない。その視点から保育に当たっていくつかの留意すべきことがある。

第1に、保育観の改革である。保育に当たっては、光の子とそうでない子を振り分けないことが大切である。往々にして教師は、自分の気に入った子を光の子とし、自分の気に入らない子と区別して扱うことがある。子どもを型にはめて管理するのではなく、イエスならどうされるかを考え、その子の成長を助ける観点から保育に当たることが必要である。

「世の光」をめざして

学長 田浦 武雄

第2に、人は、外からの迫害や中傷に忍耐づよく対処するだけでなく、自分の中にある闇や短所を克服しながら、光となることを目指すべきで

あり、イエスに結ばれ支えられて光となるという謙虚さと勇気が大切である。

第3に、善意と正義と真実とに生きることを具体的に理解し、実践することが重要である。

「光の子」は単なるスローガンではない。人にやさしく、忍耐づよく、うそをつかず、けんかをしても仲なおりにできること等を、具体的に指導できることが肝要である。

要は、世の光となることは難しいことではあるが、イエスと共にある信仰を深め、有意義な環境づくりに努め、環境を通して学ぶことの大切さを知り、志を立て、その実現に向かって献身し、社会に貢献することができるように、自らを鍛えていくことが必要である。

水曜日の礼拝から



高島 由梨

保育科2年

私の在学していた高校は、仏教浄土宗の関係の学校でした。お祈りを例にしても、キリスト教とは全く異なるお祈りでしたので、入学当初はキリスト教にうまくなじめるのかどうか、とても不安を感じていました。

高校時代は、浄土宗法然上人の教えを聞き、朝礼やその他でお祈りをし、甘茶を飲んだりする程度で、宗教に自分から深く関わることはありませんでした。

高校時代は、浄土宗法然上人の教えを聞き、朝礼やその他でお祈りをし、甘茶を飲んだりする程度で、宗教に自分から深く関わることはありませんでした。

名古屋柳城短期大学に入学し、キリスト教に触れることになってから、主体的に関わっていきたいと思うようになり、クラスの宗教委員に立候補し、礼拝で聖書を読ませていただいたりしました。初めの頃は、自分にできるかどうか不安でしたが、キリスト教に携わったことのない私でも出来ることだったので、良かったと思いました。聖書を人前で読むことで漠然と聞いている時とは違い、より一層理解も深まり、やってよかったと思うようになりました。

12月に行われたクリスマス礼拝では、いつもと違った雰囲気の中、聖劇や聖歌等でキリストの誕生を祝い、感動的な場面も何度かありました。特に聖歌隊は素敵だなあと思いました。

私は係りを通して礼拝が楽しいと思えるようになりました。そして自分から何かをやってみようと思うということは、いいことなんだと改めて感じました。宗教にもいろいろありますが、仏教であってもキリスト教であっても、皆が健康で幸せな生活が出来、一人一人を大切に生きてゆければと思います。



水田 三帆

専攻科介護福祉専攻

みなさんは、試験の時や、子どもたちの前でピアノを弾いた後、「練習の時はもっと上手に引けたのに……」と思ったことはありませんか？私はいつもそうでした。「上手に弾かなきゃ……」

という意識のせいでしょうか、異常にあがってしまうんですね。そんな私に、礼拝のオルガン奏楽は、上手に弾くことよりもっと大切なことに気づかせてくれました。

ある水曜日、いつものように、なにげなく曲を選び、なにげなく演奏しました。特別上手に弾いたわけでもなく、むしろ、またやってしまった、と沈んでいました。それなのに、何故か、「今日の奏楽気持ちよかったよ」「三帆ちゃんの奏楽はやっぱいいわ」と先生や友だちがほめてくれました。

その時、正直な所、私には何がよかったのか分かりませんでした。が、「ああ、そういうことの方が大事かな」と思ったら、一気に肩の荷が下がりました。

「上手に弾けなくてもいい」、「失敗してもいい」、そこにいる人たちが、楽しかったり、心地よかったりするだけで十分なのではないでしょうか。そこにいる人たちのために、もちろん自分のためにも、一番心地よい空間を作れるのが、幸せだと思います。礼拝でのオルガン奏楽は、私の心にゆとりをあたえてくれました。

これから色々な所で演奏する機会があると思います。みなさんも相手や自分の心地よさを追求してみてもいいのではないでしょうか。

☆今回は、昨年度宗教委員をしてくれた保育科2年生の高島さんと、保育科在学中に2年間奏楽を担当してくれた水田さん（専攻科介護福祉専攻在学中）に礼拝の感想や印象を書いていただきました。

本の紹介

『悲劇と福音——原始キリスト教における悲劇的なもの』

佐藤 研著（立教大学教授）
清水書院、2001年、186頁

本書は、清水書院の「人と思想」シリーズの一冊である。本書の目的は、「『悲劇』とは何か」という問いから始まり、その問いを基にしてキリスト教を人間学的な考察の対象としつつ、また現代にも通用する共時的な要素の抽出に主眼を置いて、キリスト教の始源を探求することである。その探求過程では、まず「悲劇的なもの」の定義について、アリストテレスの『詩学』からその答えを導き出している。次に、原始キリスト教の文書の中で一番悲劇的な要素を強く持つという前提で、「マルコによる福音書」を分析している。更にそこから「前マルコ受難物語」の再構成へ進み、それは、復活の宣言も無く、埋葬で終わっていたものであり、そこには「ヌミノゼ的核心」がよりリアルに再現された「直感」が背景にあると指摘している。そしてその「直感」の担い手が「直弟子たち」であったが、原始キリスト教の歩みは、「聖餐」の制定、パウロの「回心」とその神学などによって、「悲劇的なもの」の「非悲劇化」が存在していると指摘している。それは、悲劇を乗り越えるカサルシス的要素の方へと力点が移ったことである。それ故に「悲劇の中に」こそ「本質的なものが現れる」ことをどう捉えるかが、キリスト教にとってその存在意義に関わるほどに重要であると主張しているのである。

本書は、「悲劇性」を中心にして、原始キリスト教のみならず、歴史上の、そして現代のキリスト教の本質に関わる問題点を明確にしている。それを一言で言うならば、「悲劇を忘れたキリスト教」である。イエスの十字架という歴史上の悲劇から生まれた宗教であるにも関わら

ず、現実の悲劇を直視しないで、その論理的・神学的克服あるいは説明にだけ力点を置く姿である。その主張は、キリスト教に関わる人々のみならず、現代社会に生きる人々全てに示唆を与えるものと思われる。また、新約聖書学以外の様々な文献の引用や巻末には参考文献一覧もあり、本学の学生または教職員にとって、現代社会で引き起こされる様々な悲劇について考える時に、指針となる一冊である。

（菅原裕治、本学教員・チャプレン）

キリスト教Q & A



司祭テモテ野村 潔
日本聖公会中部教区
教区事務所主事

Q. イエス・キリストが死んで復活したって本当ですか？

A. 十字架に架けられて殺されたイエスが本当に復活したかどうかは誰にもわかりませんし、証明することもできませんが、キリスト教の歴史において、最初に成立した信仰告白のひとつに「神がイエスを死者の中から復活させられた」という言葉があるように、キリスト教にとっては、根本的な信仰内容です。

もっとも洋の東西を問わず、英雄の伝説には「聖者は異常な能力を持っていて、奇蹟を行い、不滅であって、死んでも復活して墓を抜け出し、聖なる場所に赴く」という信仰が伴いがちです。仏教伝説にもこうした復活物語は随所に見られます。たとえば達磨という僧侶は毒殺されて熊耳山に葬られるのですが、三年後に宗雲という人が達磨に合います。達磨は手に履物の片方を持っていました。人々は不思議に思って達磨の墓を開いてみると、中は空で、履物が片方残っていたと言われています。

聖書にはイエスの復活の記事が描かれていますが、復活信仰が生まれてきた背景について「ルカによる福音書第24章1節以下」を通して考えてみましょう。

ここにはイエスの十字架の死に際して、ずっと付き添ってきた女性たちが、復活の告知を受けた記事が描かれています。ルカによれば、この女性たちは、ガリラヤからエルサレムまでイエスに付き添ってきた人々でした。イエスが逮捕された後、イエスを裏切ったり、散り散りになって、隠れてしまったりした男性の弟子たちに比べて、最後の最後まで、イエスの側を離れず、それこそ地道に遺体の面倒まで見ようとしたのは女性たちでした。その理由はいろいろあるのですが、当時、社会的に弱い立場に置かれていた女性たちにとって、イエスは解放を告げる存在、自分たちの痛みを本当に受けとめ、癒してくれる人として信じられていたということではないでしょうか。イエスは、彼女たちの置かれている辛い状況に深く共感し、励まし、慰め、そして、彼女たちの存在を祝福したのだと思います。そのことは、まさに女性たちにとって福音だったのです。

昔の日本もそうでしたが、ユダヤの社会もまた家父長制の強い社会でした。夫と妻の関係から見てみると、例えば妻は夫に対しては、絶対に忠実でなければならなかったけれど、その逆は要求できなかったし、夫は妻を離縁することはできても、妻から離婚を要求することはできませんでした。また、妻が10年間、子供を授からなければ、離婚の原因になり、また、夫は第2、第3の妻をめとることができたのです。こうした点からも、社会的には、女性の地位は、男性に比べて非常に低く、不平等なものでした。

イエスに従った婦人達の中にも、恐らく子供ができず、そのことのために離婚させられたり、家を出されたりした女性たちがいたと思われまます。彼らはユダヤ教律法に規定された社会の犠牲者であったとも言えます。

恐らくイエスはそうした不幸を背負った女性

たちに慰めを与え、また力づけながら、旅をしていたのではないのでしょうか。だからこそ、この婦人たちはイエスの死を惜しんだ、ただ惜しんだだけでなく、イエスのよみがえりを強く願うようになったように思います。このような共通の体験と願いが、「イエス・キリストの復活」という信仰告白に結びついていったのではないのでしょうか。

復活信仰というのは、漠然と生きている人々には、そのリアリティというのはわからないのかも知れません。しかし、様々な苦悩や重荷を抱えながら生きている人々、殊に女性たちにとっては、正に希望であり、福音そのものだったように思います。

おしらせ

前期の大学礼拝でお話を担当する方々は、以下の通りです。

- | | |
|---------------|-----------|
| 4月10日 菅原ヲヅメ、 | 17日 丁司祭 |
| 24日 菅原ヲヅメ、 | |
| 5月1日 尾上教授、 | 8日 菅原ヲヅメ |
| 15日 後藤司祭、 | 22日 菅原ヲヅメ |
| 29日 菅原ヲヅメ | |
| 6月5日 卒業生(予定)、 | 12日 菅原ヲヅメ |
| 19日 後藤教授、 | 26日 菅原ヲヅメ |
| 7月3日 菅原ヲヅメ、 | 10日 田浦学長 |

7月17日(水) 合同礼拝

「呪縛からの解放～ハンセン病・元ハンセン病患者とその家族の名誉回復を～」
講演：太田国男先生

日本聖公会九州教区執事
菊池黎明教会牧師補

ハンセン病患者の名誉回復と「らい予防法」に基づく強制遠隔政策によって、長い間、偏見と差別の中におかれた方々の苦難の歴史を正しく理解し、分かち合うためにお話して頂きます。

2002年4月1日発行 第3号

発行所 名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54

編集兼
発行者 名古屋柳城短期大学 宗教委員会

印刷所 株式会社 丸和印刷



この印刷物は再生紙を使用しています。